Osaka University Knowledge Archive

Title	故人との絆の継続が遺族の適応に及ぼす影響
Author(s)	中里, 和弘
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/34001
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

〔　題　　名　〕　故人との絆の継続が遺族の適応に及ぼす影響

学位申請者　中里　和弘

大切な者の死は生物学的生命の消滅に伴う永続的な物理的分離を意味する。しかしながら、故人は遺族の中で心理的存在として生き続け、遺族は故人との絆を保ち続けるとされる。遺族が故人との絆を保ち続けること(故人との絆の継続：Continuing Bonds)は、遺族の内的な故人との関係性の継続を反映した具体的表象と定義される（例：心理的存在としての故人の認識、故人との心的会話）。本学位論文では以下の 6 研究を体系的に行い、故人との絆の継続が遺族の適応に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした（第 1 章）。

研究 1. 故人との絆の継続(Continuing Bonds)に関する文献整理（第 2 章）

遺族と故人との絆に関する歴史的背景を故人との絆の継続と対比して議論される故人との絆を断ち切る(Relinquishing Bonds)見解を含めて概述する(2 章-1)。故人との絆の継続の視点に関する歴史的背景、Klass et al. (1996)の「Continuing Bonds: New Understandings of Grief」の主張と評価を紹介し(2 章-2)、実証的研究を概説する(2 章-3)。そして一義的な因果の仮定に対する Klass(2006)の批判、故人との絆の継続の適応性／不適応性の両側面を認めた視点を述べる(2 章-4)。最後に故人との絆の継続に関する我が国の研究の現状(2 章-5)、故人との絆に関する今後の課題を論じる(2 章-6)。

研究 2. 日本語版 Continuing Bonds Scale の作成（第 3 章）

日本では故人との絆の継続を評価する尺度はなく、悲嘆との異同も明らかにされていない。研究 2 では 1)日本語版 Continuing Bonds Scale(日本語版 CBS)を作成し、2)関連要因から故人との絆の継続と悲嘆の異同を検討した。A 病院の緩和ケア病棟の遺族 146 名に質問紙調査（郵送法）を行い 89 名から回答を得た。調査期間は 2006 年 9 月～10 月であった。その結果、1)先行研究と同様、日本語版 CBS の構造は 1 成分であり、基準関連妥当性が認められた（故人との絆の継続は悲嘆に関連するが精神的健康との関連は低い）。尺度の信頼性は良好な内的整合性(α=0.91)が確保された。2)重回帰分析を行った結果、故人との生前の親密性、心の準備の 2 変数が故人との絆の継続と悲嘆の両変数に関連した。相違点は、悲嘆にのみ性別、故人との続柄、死別からの経過時間が関連した。日本語版 CBS は一定の妥当性と信頼性を備えた尺度であり、故人との絆の継続と悲嘆の異同が確認された。

研究 3. 故人との絆の継続の生起時期と機能についての検討（第 4 章）

死別直後の遺族への倫理的配慮から、故人との絆の継続の生起時期や機能は十分に検討されていない。研究 3 では故人との絆の継続の生起時期と機能を検討した。6 名の遺族（研究 2 対象者）に半構造化面接を行った。調査期間は 2006 年 10 月～11 月であった。その結果、1)死別から 1 週間以内の早期の段階と 49 日から 3 ヶ月の時期から故人との絆を意識し始める 2 群が存在し、2 群に共通する心理的状況（死別にまつわる行事や他者との付き合いがひと段落し、故人を振り返れる心の余裕が出てきた時期）が考えられた。2)故人との絆の継続が遺族にもたらす変化は、①ポジティブな変化（安心感、前向きな気持ち、支えられている感覚等）、②ネガティブな変化（喪失感、精神的圧迫感）、③ニュートラルな変化（家族の中での役割変化、死生観の変化）に分類された。故人との絆の継続は概して遺族の喪失に対する感情を調整するコーピングとして機能し肯定的な感情や認知的変化をもたらすが、喪失を消化しきれていない時期では遺族に否定的感情をもたらす可能性が考えられた。

研究 4. 故人に対する生前の情緒的依存性の測定（第 5 章）

故人に対する生前の依存性は、遺族の悲嘆に影響すると指摘されているが抽象的概念で捉えられることが多い。研究 4 では生前の故人に対する情緒的依存性を測る尺度を作成した。死別経験者のサポートグループ B に所属する会員 118 名に質問紙調査（郵送法）を行い 91 名から回答を得た。調査期間は 2005 年 11 月であった。探索的因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行った結果、3 項目からなる生前の故人に対する「情緒的依存性尺度(Affectional Dependency Scale：ADS)」が作成された。基準関連妥当性が認められ（悲嘆と正の関連性をもつ）、尺度の信頼性は良好な内的整合性(α=0.83)が確保された。ADS は簡便性の高い一定の妥当性と信頼性を備えた尺度といえる。ADS の合計得点の分布に正規性が確認され、ADS は遺族が生前故人と親密な関係であっても過度な情緒的依存対象でない故人との関係性を評価することができると考えられた。

研究 5. 終末期がん患者と家族間で交わされる思い・言葉についての検討（第 6 章）

終末期患者と家族間では伝えたい思いを伝えることは患者の心理的・実存的苦痛の緩和、遺族のグリーフケアに繋がるとされる。本研究では、終末期がん患者と家族間で交わされる思い・言葉について、1)思いの言語化の程度、2)家族から患者に思いを伝える行為と遺族の後悔との関連、3)家族から患者に思いを伝える行為に影響する心理的要因、4)医療者の対応の有無と必要性を検討した。ホスピス遺族 1002 名に質問紙調査（郵送法）を行い 584 名から回答を得た。調査期間は 2010 年 10 月～2011 年 4 月であった。その結果、1)患者と家族共に言葉にする割合が最も高かったのが「感謝」であり(患者 61%、家族 47%)、他 5 つ（愛情、謝罪、死別後の家族への願い、絆の継続、相手への許し）の思いを言葉にする割合は 3 割に留まった。2)現在の後悔では、「思いを言葉にしたが患者には伝わっていない」と思う遺族が最も後悔が強かった。3)家族が患者に思いを伝える行為の背景に 4 つの心理的要因（伝えることの不安・抵抗、タイミングや伝え方が分からなかった、思いは伝えていた、以心伝心／言葉にしなくても思いは通じる）が仮定された。心理的要因は家族から患者への思いの言語化の有無、医療者への対応のニーズに影響していた。4)遺族の 14～20%で、思いを伝える行為に対する医療者の対応が家族のニーズと一致していなかった。医療者は、終末期患者と家族が伝えたい思いを明確に言語化することが少ない現状と背景にある心理を理解した対応が求められる。

研究 6. 故人との絆の継続が遺族の適応に及ぼす影響についての検討（第 7 章）

研究 6 では、1)生前の故人との関係性や意味の再構成との関係から故人との絆の継続が遺族の適応に影響するモデルを構築、2)モデルを検証した。3)生前に故人と遺族間で交わされた思い・言葉をモデルに加え影響を検討した。お寺の檀家家族 400 人に質問紙調査（郵送法）を行い 219 名から回答を得た。調査期間は 2010 年 3 月～7 月であった。

1)共分散構造分析を行った結果、データは本研究で構築したモデルに十分に適合していた。モデルから、①故人との絆の継続は生前の故人との親密性を核とする。②故人との絆の継続と悲嘆は親密性が影響する点で共通するが、悲嘆は情緒的依存性の影響が強く、死別からの経過時間、性別は悲嘆にのみ関連する。③情緒的に依存していた者を亡くした場合、故人の死に意味了解ができていない状態、アイデンティティの肯定的変化を見出していない状態で故人との絆の継続を感じることは悲嘆を強め、悲嘆が精神的不健康に繋がる。④アイデンティティの肯定的変化を見出している状態で故人との絆の継続を感じることは肯定的な時間的展望に繋がることが示唆された。

2)生前に故人と遺族間で交わされた思い・言葉をモデルに加えた結果、①遺族が思いを受ける側では、故人から具体的な言葉を聞いた方が思いを受け取ったと感じる。②遺族が故人に思いを伝える行為に生前の故人との親密性や性別が影響する。③故人との関係が親密であるほど、遺族は思いを言葉で伝え、故人との繋がりを強く感じる。④生前、故人が遺族に思いを言葉で伝えた方が遺族の悲嘆が少ないことが示唆された。

本学位論文の意義としては、1)我々が重要他者との別れにどのように向き合い、今の関係性をいかに構築するか見直す有益な資料となる。2)ケア従事者が死別前後で家族に接する際の対応、不適応に陥るリスクのある家族のスクリーニングに役立つ。3)グリーフケアで遺族が語る故人との絆の継続を理解する際の重要な資料を提供する。総合論議では、以下の 4 つの観点から故人との絆の継続が遺族の適応に及ぼす影響を述べた。

1)故人との絆の継続の理解としては、故人との絆の継続を評価する適切な指標を得ることは実証的研究を進める上で最も基礎的かつ重要な事柄であり、妥当性と信頼性を備えた日本語版 CBS を開発した意義は大きい。遺族に接する上では、遺族は死別にまつわる事柄がひと段落し、故人を振り返れる心の余裕が出てきた時期から故人との絆を感じ、遺族によって故人との絆の継続を感じる内容に違いがあることを理解する必要がある。

2)故人との絆の継続と悲嘆との異同に関しては、故人との絆の継続や悲嘆の基底には故人との親密性がある。故人との絆の継続は故人との親密性に起因するが、悲嘆は生前の故人への情緒的依存性、死別からの経過時間、性別の影響を受ける。悲嘆の表出だけでなく故人との絆に目を向けることで、悲嘆のみをベースに故人への思いを捉える他者理解を修正し、遺族が他者と故人への思いを共有する上で役立つ視点である。

3)故人との絆の継続の適応性／非適応性に関しては、故人との絆の継続は、遺族の日常生活の問題や喪失に対する感情調整として機能するが、死別が十分に整理しきれていない時期では喪失感や精神的圧迫に繋がる可能性を持つ。故人との絆の継続が否定的に作用する条件に生前の情緒的依存性、否定的・肯定的にも作用する条件に意味の再構成が明らかにされた。

4)生前に故人と遺族間で交わされた思い・言葉との関連に関しては、病死や老衰は一般的に死別前に故人と遺族で会話をする時間があるとされるが、実際には病死や老衰であっても思いを言葉することは難しい。遺族から故人に思いを言語化する行為には 3 つの要因（故人との生前の親密性、性別、心理的要因）が影響し、心理的要因は医療者の対応の評価やニーズに影響を及ぼす。故人から遺族への思いの言語化は遺族の思いの受け取り、悲嘆の軽減に繋がる。

今後は縦断的研究から故人との絆の継続が遺族の適応に及ぼすモデルの更なる検証が重要であり、また臨床の応用では故人との絆の継続に焦点を当てた介入法が有効性となる条件や効果に関する臨床データからの検討が求められる。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　中　里　和　弘　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教 授	佐 藤 眞 一
	副 査　教 授	渥 美 公 秀
	副 査　准教授	権 藤 恭 之

論文審査の結果の要旨

超高齢社会は多死社会でもある。このことは，病院の奥に隠されることと多かった死がより身近になることを意味している。したがって，死はまた，看取る者にとって対峙すべき課題としての切実さから再認識されている。大切な者の死は，永続的な物理的分離を意味するものの，故人は遺族の想いの中で心理的存在として生き続け，遺族は故人との絆を保ち続ける。遺族が故人との絆を保ち続けることに関する研究は，近年の死生学において「故人との絆の継続(Continuing Bonds)」として，「悲嘆のプロセス」および「死の意味の再構成」と共に遺族研究の重要な課題と認識されている。遺族の故人との絆の継続は，心理学的な具体的表象（例：心理的存在としての故人の認識、故人との心的会話）として定義される。本研究では故人との絆の継続を具体的な心理学的表象として実証的に検討することを通じて故人との絆の継続が遺族の適応に及ぼす影響を明らかにすることを目的に，６種類の研究が体系的に行われた。

研究1では，故人との絆を断ち切るというアプローチと対比しながら，絆の継続の意味を，先行する実証研究を通じて検討し，故人との絆の継続の適応性／不適応性の両側面を認めた視点を含む今後の研究課題が提示された。

我が国ではこれまで故人との絆の継続を評価する尺度は作成されておらず，死別の悲嘆との異同も明らかにされていなかった。そこで，研究２において，日本語版Continuing Bonds Scale(日本語版CBS)が作成され，故人との絆の継続と悲嘆の異同を検討された。

従来，我が国では，死別直後の遺族への倫理的配慮から，故人との絆の継続の生起時期や機能は十分に検討されてこなかった。研究３では，故人との絆の継続の生起時期と機能が半構造化面接によって検討された。その結果，死別から１週間以内の早期の段階からと４９日から３ヶ月の時期から故人との絆を意識し始める２群の存在が明らかにされた。これら２群に対する故人との絆の継続の分析から，遺族の喪失に対する感情を調整するコーピングとして機能し肯定的な感情や認知的変化をもたらすものの，喪失を消化しきれていない時期では遺族に否定的感情をもたらす可能性が示唆された。

故人に対する生前の情緒的な依存性は遺族の悲嘆に影響すると指摘されているが，客観的に測定されることがなかった。そこで，研究４では，生前の故人に対する情緒的依存性を測定する「情緒的依存性尺度(Affectional Dependency Scale：ADS)」尺度が作成された。

終末期患者と家族間では伝えたい思いを伝えることが，患者の心理的・実存的苦痛を緩和し，そのことが遺族の悲嘆に対するケアに繋がると考えられる。研究５では，終末期がん患者と家族間で交わされる思い・言葉が多面的に検討された。その結果，患者と家族の間で交わされる言葉は「感謝」が最も多いこと，家族が患者に思いを伝える行為の背景に４つの心理的要因のあること，思いを伝える行為に対する医療者の対応が家族のニーズと一致していないことなどが明らかにされた。

研究６では，以上の研究の成果を用いて，生前の故人との関係性や意味の再構成との関係から故人との絆の継続が遺族の適応に影響するモデルが構築され，構造方程式モデリングによって親密性，悲嘆，情緒的依存性，経過時間，死の意味了解，精神的健康，時間展望などの点から実証的に検証された。

本研究は，従来，十分な研究が蓄積されていなかった故人との絆の継続の意義を，尺度作りから始めて多面的に実証し，今後の臨床応用への示唆までを示したものとして臨床死生学における重要な価値を持つと評価でき，その価値は極めて高いと思料する。以上より，本論文は博士（人間科学）の学位授与に値すると判定した。